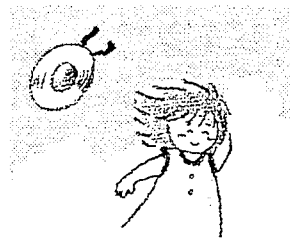


子供会シリーズ (13)

子どもの遊びを保障する

保障する



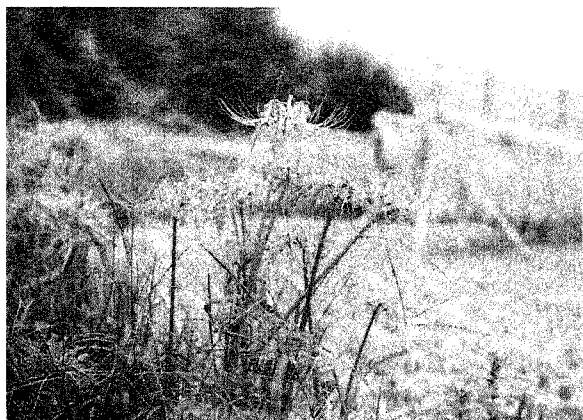
今まで十二回は子どもの心の発達と子ども会との係わりについて書きました。これからは子どもの心を考えながら子ども会、育成会の運営のしかたについて考え

ていきます。学校では先生から課業・課題を与えられます。それで子どもは色々考えるけれども発想をかえて見ると、それは「請負の仕事」ではないでしょうか。子ども自身の自由な生活の場とは言えません。学校から帰ると、塾やけいこに追われて、あとはテレビやファミコンで一日が終る。このような生活では、子ども自身の生活の場がないといえるでしょう。家でも、子ども会でも、育成会でも、子どもが子ども自身で遊べる時間と場所を保障しましょう。親がなにか一つ拘束しないで、自由

に遊べる時間を保障してやりたいのです。一軒だけそのようにしてもそれは保障したことにはなりません。わかりきった事ですが、一人だけでは遊ぶ相手がいらないからです。まず地域の人々や、お父さん、お母さんが相談して遊ぶ時間と場所をつくりましょう。家のテレビを消して、みんなを外へ出て子どもが遊べるようにする。そうする事が育成会、子ども会の始まりだと言ってよいでしょう。学校へ入る前(幼児期)に遊ばせることによって、又遊べない子も近隣の子の中に入る事によって、互いに付き合うようになります。幼児のうちにはごく限られた子としか遊べませんが、時間がたつと大勢の子と遊べるようになります。近隣集団の一員となります。そしてその集団のもっている雰囲気になれて、自由に遊べるようになります。今年ある育成会でレクリエーションをしたところ、まだ学校へ行かない幼児が五・六年生といっしょになってゲームをしたり、肝だめしに入ったりして結構うまくやっています。幼児も子ども会に入ることができると思いました。次回遊びの心と子ども会の運営について書きます

都留文科大教授

森江晃三



今月の花「ヒガンバナ」

九月の花「ヒガンバナ」

ヒガンバナは日本各地でさまざまな異名がつけられています。ハカケバナ、マンジュニャゲ等々。それだけこの花が皆に注目されているのだと思います。日本でも西の方に多く、北の方には少ない植物です。市内でも禾生のあたりしか目につきません。有毒植物ですが、かつて地方によってはこの球根のデンプンを毒ぬきして食用にしたところもあると聞きました。

※子どものことなら、どんな事でも結構です。電話をください。

学校教育課・教育相談室

(48)11111・内線2114

小山田左兵衛尉信茂 (上)

武田二四将の一人である、小山田信茂の話に移りましょう。

信茂は幼名を藤乙丸、通称を弥三郎といひます。父出羽守信有が若くして亡くなりましたので、天文二一年に家督を継いだときは、まだ若干十三歳、いまの年齢では十二歳という若者でした。

この若大将は、歴史の舞台上に華麗に登場してきます。

「妙法寺記」によりますと、家督相続したその年には、今川家と武田家に縁組みがあり、今川義元の息女を駿府に迎えるにいくのですが、弥三郎はこの迎えの使者に加わって「駿府二行キ大イニ誓ヲトル」とありますから、婚礼儀式での言上、立居振舞は、まだ紅顔可憐の表現が当る少年武者としては、実に見事なものであったでしょう。

一年おいて天文二三年、弥三郎満年齢で十四歳の年、北条氏政のもとへ晴信の息女が嫁入ることになりました。若輩ながら、家督を継いだ郡内の領主としても、親戚筋としても重要な儀式となれば欠くことのできない代表者です。妙法寺記は「弥三郎氷岐女ノ役

小山田シリーズ

小山田左兵衛尉信茂

ヲ勤ム其作法礼大人ニマサレリトテ諸人はヲ称エケルトソ」と記されています。氷岐女とは、藝目のことで、武人の婚礼には、儀式として、かぶら矢を作法に従って鳴らす役があり、この役を弥三郎がやったわけですから、若輩のことですから見守る人々に不安があったことでしょう。ところが堂々と、とても十四歳の少年武者とは思えない、作法にかなった立派な振舞いであったため、並いる両家の錚々たる面々から称賛されたというわけですから。

実は、弥三郎は父出羽守信有が在世の頃、既に晴信に謁見しています。父の催した勝沼大善寺での勸進興業に、藤乙丸と称していた弥三郎も父に伴われて参観し、晴信以下武田の名だたる大将も参観したことが大善寺文書に記されています。この頃から既に若年ながら謡曲、能をたしなむ教養があったことをうかがわせます。

弥三郎の才能は若いうちから晴信の目にとまっていた。重臣山県昌景のことばとして「若手ニハ小山田弥三郎毎事相調ヒタル人ナリ又文字ノ事ハ常ニ弥三郎ニ読マセテ聴玉フ」とあって、武田の中にあって相当な学問通であったことを証明しています。